「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組
「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～鳥取県～

【中】教員の英語力（28．2%）、生徒の英語力（35．7%）とも低迷。さらに場面・目的・相手を設定した言語活動の活用や、指導と評価の一体化など、指導力の向上が必要。
【高】生徒の英語力（36．5%）の低迷。特に「話す」「書く」力が十分に伸ばされていない。

・４技能育成のための指導と評価の一体化
・研修協力校の研究支援と研究内容の普及
・専門機関（立命館大、岐阜大）と連携した英語教育改善プランの策定と目標管理
・高大接続改革、大学入試改革に対応した教員の指導力向上研修

英語教員の指導力・英語力向上

鳥取県英語教育推進会議

小中高一貫した英語教育のため、立命館大学、岐阜大学と連携して鳥取県の英語教育改善プランを策定。指導実践事例集（DVD）を作成中

各　種　研　修

◇研修協力校支援研修（小中高各１日）
外部有識者を招へいし授業研究会をとおして、効果的指導法等を域内還元

◇英語教育推進フォーラム（小中高半日）
推進会議、研修協力校の成果を発表し、地域全体で英語教育を強化

◇生徒の学習意欲を高める指導と評価の研修（中高１日）
４技能統合型の指導に見合った定期テスト問題及び評価のあり方を研究

◇英語教育推進リーダーによる英語指導力向上研修と公開授業
中央研修内容の伝達講習と域内の教員を対象にした自校での公開授業

◇教員の英語力向上のためのセミナー及び外部試験事業（４日）
外部試験（TOEIC）を活用した中高教員の英語力向上

取組と成果１　倉吉市立明倫小学校

［取組］
○人とのつながりを楽しめるコミュニケーション活動や課題設定の工夫(Small Talkの活用)
○小中連携、小小連携の会を年各2回開催
○児童の意欲を高め、次のステップへとつながるパフォーマンステストの工夫
○児童の将来につながる活動内容の設定

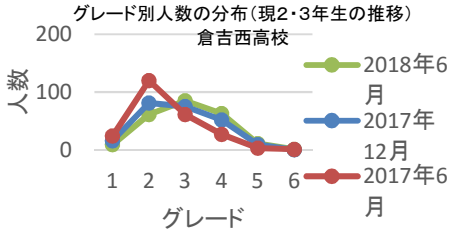
［成果］
◆外国語の授業が楽しいと感じる 児童の割合　97．6%
◆先生や友達と英語で話すことが好きだと答えた児童の割合　85%
◆英語を使って外国の人と話をしたいと答えた児童の割合　56．4%

成果２

○外部試験事業導入により教員の英語力は向上したと考えられる（特に高校）
○それに伴い、生徒の英語力も微増ではあるが向上してきた
○言語活動は割合は減っているが、場面や状況を設定し、内容は充実

英語教育実施状況調査より		H26	H27	H28	H29	H30
求められる英語力を有する教員	中	26.5	25.7	20.7	28.2	35.7
	高	75.4	70.9	76	83.3	97.5
求められる英語力を有する生徒	中	32	40.7	34.4	35.7	37
	高	29	35	33.9	36.5	33.3
CAN－DOリスト達成状況の把握	中	0	28.1	28.1	29.8	38.5
	高	40.3	33.3	36.4	43.4	37.5
言語活動時間の割合	中	26.7	69.8	45.3	73.5	67
	高	40.3	49.8	46.3	50.8	48.7

取組と成果３　倉吉市立東中学校・倉吉西高校



○生徒の英語運用能力　GTECの活用（年2回受験）
特にライティング力の向上が顕著

英語教育実施状況調査より

倉吉東中	H29	H30
パフォーマンステスト（ライティング）の回数	3回	22回
求められる英語力を有する生徒の割合	50.5%	64.7%

CAN-DOリストの運用が生徒の英語力向上に奏効

普及

英語教育推進フォーラム
○小中高の異校種の教員が集まり、研修協力校3校の研究成果を、ルーブリックや教材、授業の様子が分かる動画などを用いて共有。英語教育推進会議の外部有識者による指導助言。

小中連携授業研究会
○小中連携のあり方について外部専門機関から講師を招き、小中高教員を対象に講演とワークショップ開催。

課題

○小学校
授業改善や情報交換の期間を設け、全面実施に向けた教師の指導力向上と教師の不安の解消
○中学校・高等学校
・CAN－DOリストの達成状況を把握し、各学校の実態に応じた指導改善の推進
・場面・目的・相手を設定した言語活動のさらなる工夫
・書くことの内容、文章構成の手立てや適切なフィードバックに係る指導改善

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～鳥取県倉吉市立明倫小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

2020年度新小学校学習指導要領の全面実施を控え、英語によるコミュニケーション能力を確実に養い、グローバル化等に対応した人材の育成を強化するために、次の3点を重点的に取り組む。
・人とのつながりを楽しめるコミュニケーション活動や課題設定の工夫
・地域とのつながりを視野に入れた課題設定の工夫
・未来の自分とのつながりを意識できる課題設定や評価の工夫

具体の取組の内容

・つながる力を育むためのsmall talkの活用（身近なものを題材にしたsmall talkのテーマ設定）
・「会話がつながるようになった」と実感できるスモールステップでのコミュニケーション能力の育成
（コミュニケーション活動の際に、ポイントを提示し、相手を意識させる）
・小中連携及び小小連携の会をそれぞれ年2回実施
（学習状況の確認や授業研究会、合同学習、中学生をモデルとした教材作成等）
・児童の将来へつながる活動内容の設定や最終ゴールの設定
・児童の意欲を高め、次のステップへとつながるパフォーマンステストのあり方についての提案
・英語を使うモデルとしての教師、高学年の児童や中学生の姿を見せる場を積極的に設定し、児童の興味・関心や意欲を高める

成果①

◆外国語の授業が楽しいと感じる児童の割合
明倫小　97．6%
◆先生や友達と英語で話すことが好きだと答えた児童の割合
明倫小　85%
◆外国に旅行に行ったり、留学したりしたいと答えた児童の人数
明倫小　46人（85人中）
◆英語を使って外国の人と話をしたいと答えた児童の人数
明倫小　48人（85人中）

成果②

◆やりとりを含む活動を意図的に増やし、コミュニケーションのポイントを意識して活動させることにより、相手意識を持って会話を楽しむ姿が見られるようになった。
◆パフォーマンステストを複数回行うことで、個別の習熟度や前回からの伸びを、教師も児童も確認することができた。
◆ 異学年や他校との交流をすることで、友達のことを知る楽しさや伝えることの楽しさを児童が感じていた。

今後の課題・方向性

◆ 2020年度全面実施を考慮し、評価についての研修及び検証が必要である。
◆ 中学校入学時の児童の習熟を考慮し、小中や同中学校区の小学校間の積極的な連携を図っていく。
◆ 本年度は本事業や先行実施の取組を始めたばかりであったため、これまでとの比較がしづらい面があった。今後継続してアンケート等での児童の観察や検証を行い実態把握を行うとともに、経過を見ていく。
◆ 職員研修や研究授業を通して、授業改善や情報交換の機会を設け、全面実施に向けた教師の指導力向上を図る。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～倉吉市立東中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

現状：言語活動に意欲的に取り組む生徒が多い　⇔　自らの力をさらに伸ばそうとする生徒が少ない
相手に分かりやすく情報・気持ち・考えを伝える力が乏しい

→　手立て1：到達目標を明確にした言語活動の設定と評価の工夫　　手立て2：話す活動と書く活動を中心とした帯活動の導入

具体の取組の内容

本校研究テーマ

「話すこと」「書くこと」を中心とした言語活動の充実
～授業とテスト・家庭学習との「つながり」を意識して～

＜5つの取組（対応手立て）＞
取組１　毎週１回の教科部会の設定（１、２）
取組２　東中版CAN-DOリストを基にしたパフォーマンステストの実施（１）
取組３　東中版ルーブリックの策定と活用（１）
取組４　自学ノートの効果的な活用（２）
取組５　読んだり、見たり、聞いたり、学んだりしたことを基に自分の考えや気持ちを伝え合う活動の実施（１，２）

＜本校英語科共通の取組詳細＞
1. パフォーマンステストの実施
　「話すこと」・・・　年22回以上
　「書くこと」・・・　年７回以上
　＊取組前にルーブリックを必ず生徒に示す
2. 自学ノートのスパイラルな取組（※）
（※授業で「話す」言語活動を行う　→　家庭学習で自分の意見を書く　→　定期テストに類似問題を出題する）
3. どの授業でも帯活動としてのsmall talkを導入
4. 教科書本文の内容を基に自分の考えや思いを伝え合う活動（2・3年生のみ）

◎３，４は外部専門有識者の「会話方略」についての指導をもとに工夫

成果①

◎生徒の英語力の向上

	H29	H30
求められる英語力を有した生徒の割合	50.5%	67.4 %
英検３級取得者数	32 名	60 名

○意欲の高さ→ fluently に書く力アップ
（Writing Grade 4 (高校１年生程度）の生徒 32 %）
［３年７月・１２月実施　GTECより］
○到達目標の明確化や生徒間コミュニケーション活動の増加など、取組５が奏功

◎外部専門機関の指導による「会話方略」を活用して、retellingやsmall talkに取り組んだ成果と思料。

成果②

◎自律的学習者の増加(生徒)
「書く活動」において、東中版ルーブリックに示されたスモールステップを自ら何度も参照し、正確さを意識したり表現に工夫を凝らそうとする生徒が増えつつある

◎外部専門機関の指導をもとに、教科部会による検討を重ね作成

◎全校的な指導と評価の一体化の促進(教員)
（前年度 3回 →今年度 22回）
年度当初にCAN-DOリストを整理すると同時にライティングテストの増加を設定。学期や単元ごとの指導と評価及びテストが効果的につながるよう、英語科全員で取組みノウハウが蓄積されつつある。

今後の課題・方向性

○本校生徒が「できるようになってきていること」
・与えられたテーマについて十分な量を書くことで既習文法や語句が少しずつ定着してきている。

○さらなる授業改善に向けた「3つの柱」
① まとまりある内容をやり取りする力を伸長する指導
・新学習指導要領での「思考力・判断力・表現力」

③ 要点をつかみながら文を読む力の伸長
・手立て２の主活動として
・効果的な referential question の研究

① 生徒の使う英語のfluency と accuracy のバランス
・「話すこと」では fluency を重視
・「書くこと」では accuracy を重視
→スパイラルな語順指導・語彙指導・文法指導

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～鳥取県立倉吉西高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・既習の語彙や文法表現を用いて、積極的に自分の意見や考えを表現できる生徒を育成する。
・外部専門機関と連携し、生徒の英語に関する4技能がバランスよく育成されるように指導力の向上を図る。

具体の取組の内容

○指導方法と評価方法の改善
言語活動を意識的に取り入れるとともに、授業での活動を評価につなげる。パフォーマンステストを実施し、ルーブリックに基づいた適正な評価を行う。

○外部検定試験の活用
GTECの受験回数を2回に増やし、4技能受験を実施する。学年間で結果の共有を行い、授業改善に生かす。

○外部専門機関との連携
立命館大学山岡憲史教授より授業に関する指導・助言を受け、4技能をバランスよく育成するための授業改善に取り組む。

○他校種との連携
県内高校だけでなく、研修協力校として同事業に取り組む小学校・中学校にも授業を公開し、校種を超えた連携を行う。

成果①

○英語教育実施状況調査より
教師、生徒ともに授業中の英語使用の機会が増えた。

ア　授業における、生徒の英語による言語活動時間の占める割合　（授業時間の50%以上実施の教員）

イ　授業における、英語担当教員の英語使用状況　（発話の50%以上を英語で行っている教員）

（%）

	ア	イ
H28	15.3	15.3
H29	35.7	21.4
H30	38.4	100

成果②

○英語教育実施状況調査・GTECより
授業中の英語使用の機会が増えたことで、英語で表現することに対して意欲的な姿勢が見られるようになり、一定時間内に書くことができる量が増えた。

入学後、英語力が向上した（「どちらかといえば向上した」も含む）と感じる生徒の割合（%）

	現2年	現3年
H29　8月	46.2	51.3
H29 12月	50.8	56.8
H30　6月	65.8	64.9

2年生におけるライティングスコアのグレード別割合（%）

H27 12月	9.5	27.0	18.9	42.6	2.0	0.0
H28 12月	0.0	11.7	18.3	69.2	0.8	0.0
H29 12月	6.1	11.4	17.5	64.9	0.0	0.0
H30　6月	0.0	0.9	26.5	72.6	0.0	0.0
グレード	1	2	3	4	5	6

今後の課題・方向性

○生徒の表現力向上
即興でのやりとりによる既習表現の活用場面を継続して持たせ、話したことや書いたことを生徒自身が振り返ることができる自己評価シートについて研究する。

○教師の指導力向上
書くことの指導に係り、内容、文章構成の手立て及び適切なフィードバックについて指導改善を行う。

○評価方法の改善
パフォーマンステストを年間を通じて複数回実施するとともに、適切な評価ができるようにルーブリックの見直しを行う。